

薬害ヤコブ病問題 2001 国際シンポジウム シンポジウム開催の主旨

実行委員長 牧野 忠康

(日本福祉大学社会福祉学部保健福祉学科教授)

国際シンポジウム開催の目的は三つ

1. 医原性クロイツフェルト・ヤコブ病（薬害ヤコブ病）被害者・遺族の完全恒久救済を実現させること
2. 医原性および薬害による生命破壊の発生の真相究明と根絶対策を実現させること
3. 家畜由来感染症としての変異性CJD（vCJD）の正しい理解と予防対策の実現をすること

医原性CJD（薬害ヤコブ病）被害者・遺族への完全恒久救済の実現

大津地方裁判所で 1996 年に谷たか子（故人）・三一（被害者の夫）さん夫妻により闘いが開始され、大津と東京で被害者や遺族が提訴していた裁判闘争が 2001 年 7 月に両地裁とも結審となりました。同時に両地裁とも裁判長の「和解勧告」が出されており、被告の国・厚生労働省とビー・ブラウン社らと今まさに熾烈な「和解折衝」の最中にあります。

「和解」条件は、まず一刻も早く被告である国とビー・ブラウン社らが責任を認めて「謝罪」し、原状回復を含む被害者・遺族に対する完全恒久救済の諸条件を関係者らの要求と意見を受け入れて調え明示すると共に、この輸入ヒト乾燥硬膜移植による医原性CJDの発生を予防できず被害の拡大に至った真相を明らかにしその責任の所在を明確にすることです。

国とビー・ブラウン社らに速やかに先の条件を調えさせ、被害者・遺族の方々と共に早期解決を勝ち取るために、英国から汚染成長ホルモン剤の被害児の父親ノエル・ポールドウィンさん、著名なCJD研究者のハラシュ・ナーラン博士、CJDケア・ネットワーク活動をされているジリアン・ターナーさんをお招きして国際的な視座での支援として、われわれは本シンポジウムを主催するものです。

医原性および薬害による生命破壊の発生の真相究明と根絶対策の実現

医原性CJDの「薬害ヤコブ病」は、「薬害エイズ」事件に酷似した被害発生の構造から日本では「第二の薬害エイズ事件」といわれ、繰り返された「社会構造」由来の薬害事件です。

この繰り返される薬害の根絶のために、事件発生の真相究明と薬害根絶の対策実現を

国・厚生労働省に迫るために、われわれは本シンポジウムを主催するものです。

家畜由来感染症としての変異性CJD（vCJD）の正しい理解と予防対策の実現

日本では2001年9月、「農水省は10日、千葉県白井市の酪農家が飼育した乳用牛（ホルスタイン、雌、5歳）が狂牛病（牛海綿状脳症）の疑いがあると発表」し、わが国最初の牛海綿状脳症（Bovine Spongiform Encephalopathies；BSE）の発生が確認されるに及んで、大騒ぎとなりました。

食糧や飼料の輸入大国である日本は、家畜などの動物由来感染症や食品由来の感染症に細心の注意を払って予防に努めなくては、国民の生命や健康が危険にさらされることになる。2001年6月の段階で、「欧州連合（EU）の執行機関である欧州委員会が、欧州で大被害を出した狂牛病が日本で発生する可能性がある」とされていました。しかし、またもや農林水産省と厚生労働省は官僚の怠慢から、水際でくい止めることに失敗し、その後の対応もずさんさが目立ちました。ここでも、官僚の国民の生命と健康を守る責任が希薄である構造が暴露されています。

牛海綿状脳症の問題は、われわれの正しい知識と理解がなしには、適切な対応ができないと考えます。とくに、医原性CJDとBSEおよび変異性CJD（vCJD）が混同され、医原性CJDの被害者が差別・偏見のもとにさらされ新たな被害が追加されることにもなります。

われわれは、家畜由来感染症としての変異性CJD（vCJD）の正しい理解と予防対策の実現を求めて、本シンポジウムを主催するものです。

感謝とお願い

はるばる日本にまできてくださってわが国の医原性CJDの被害者・遺族やわれわれに貴重な経験と知恵や学識を提供して下さいますノエル・ポールドウィンさん、ハラシュ・ナーラン博士、ジリアン・ターナーさんにたいして、主催者とシンポジウム参加者を代表して心から御礼を申し上げます。

本シンポジウム参加の全てのみなさん、全ての人間の生命と健康が尊重され、一人一人が自己実現を目指して幸せを掴むことのできる地球平和が確立される社会づくりと行動が必要なことを共有し合えるシンポジウムに盛り上げてください。